関ヶ原軍記 三編 十七 十八

へ遠13
2207
39

凡士農工商ともに文くの職分家業は固て相用の器物を造り
今日を営む支世界一般に欠ぬ絵画の巻中小説より白話
のまで種くの書入又は彩色画き君臣父子の中々面白き
男女の陰陽ならず画き君臣父子の中々面白き合事
問くこと其筆に尽し一時の興より家にての戯まれ
其職分に道具へ充付ふ小説より著述抄録筆者の誤り
のふも口言語とく其通ちを知る巻中の戯画楽書諸一絵
池田屋当代是を欲ん為に其源一因て素代て諸君子諸ふるの爾

和漢 貸本所 東京牛込細工町 誠光堂 池田屋清吉

廣石山人識

門へ遠13
番2207
巻39

牛込 木 池清

関ヶ原軍記二篇巻之拾七

目録

一 真田昌幸偽りて敗くる事 秀忠卿と

并 中納言殿御憤りの事

一 昌幸誅戮を以て宮内卿と偽り事

并柳原老功酒井牧野備後守退隠
ん之事

池清

宮城県図書館

関ヶ原軍記二編巻之拾七

真田安房守偽つて
秀忠卿と歌を奉る事
并 中納言殿御情を葛西事

去程に江戸
御進發有て信州大河ゝ御陣を
居へなるところ
真田伊豆守
中納言秀忠公

ゆいのうびん伊勢山手陣へ
ほど今此時御陣へ来りて
中納言殿へ弾指し父安房守
御出馬ありし面目もなき次第
実なりとぞ中しける
秀忠公より光長卿へ
しきりに武門乃ゐ父子おれ
うもなんぢすまうくる

家老毛利右京亮父安房守
内膳公法名
も元ゆり
頃なりすさび拍子味なる事
未ざるべまし列ち昌幸と此
びに先陣をさせくし上洛を
度紀なりぬ柳原或紀右衛
なりびて本多佐渡守 石川
玄蕃頭本能水より出迎あて

上田隠り州田るどさを手のち
信濃国方より書札をもりく
吉田信幸代家人城上田の城中
へ伴へをられる
よつつり
い急ぎ安房守父子共者出城
されくられれやしてもうのうび
御上洛の御供被仰付べきこと
尤も柳系或弱ち傳ゝ御後表

て先陣被さるべきるり急ぐく
子息伊豆守も出時方之安房守
ゆも　　内府公ゝ御供略
る御ゆ手るるふとて御歌の
之被お立は御供ぬぞと急度
伴入られりこの時安房守も
安供を独之してこのゝび菜
し御上洛の先陣を

仰付られは有る間敷事仕合せ
く武つの実如と為知事は今
早速罷出べくはこの如
御上洛の御先に大事之武具
急度其外用意仕り又兵粮運送
の事は永陸の用意武者揃
義く一度日程を御定り申べ
の条おそのひ次第御先

城仕るべきふくいと申上り
儒石乃
秀忠卿も
この一言千歌
一度代の形り真田父子城よ
のさん事楽不敵のもの
なれば也申されぬ弱くおひし
ちりされば敵ひ一度日は後も
道理急げ同じ理なり高田

父子先陣せるに於ていたるころ
中をへその東をへ行の沖をも
あるく大河こ沖岩陣をり給る
ふ一夜日ゐても安房方より
行の沙汰をもちゐく又出陣の指図
も見へ給ふ
秀忠ゐより仰出されける
ゐ室野代用をも大概事仕りて

出陣被されいらくへの
御ゐ上ちりをるに兵今上回
代指図と窺ひ見るり義指物
を建るべ様写取り出出よ
れ見へ給ふ陣外ゐ逆徒
木城表と義べく要害きそ
しく奮戦して見へ
初て彼彼者ども博多をもりて

大きに伊豆守殿の仰せ使ひあり
陣中へ入らんと云ふ時安房守
殿いづくにか先日は御待
おも御いざるゆへ御待被申
お御へ度又跡とび上方の合戦
を実来如何の安危ものを
軍い大きもむげらめるべし

後く　中御元殿の御勢
この所をさしおくはいとをを
大方い　内府公の御後
如るべしとなげるゆへ御待
殿と日を迎しに今いをや
義陣の用意もおそのひ
へむ殿ひ御伊豆守殿
搦迎くへい寄せ身や御をお

いづれの御定めて所立被あるべき事

徳川家此比の心ざしとて

一虚実の攻防しかるべき事

如何様にも押強く

弓矢の強弱を以この一戦の

年ありとまづい恵こんのロ上

あり先の敵を被立させ申

理敵る御事をさせくその虚実

討んとの軍法天晴不敵なんぞ

なる真田父子ぐりつ条言張

同りこんの夏ゐり

秀忠の勇て大ひふ始り

こんひ勇こ真田ぐ雑言られ

楽ゐるこんこ

我を欺

夫れ人こそ

寄るべくもなくなりぬ　さて百一人なれ
合戦の勝負　知るべきもなし　西国父子地攻
敗して首を見せんと　指りて
その所を引　弓矢を射の
面目生甲斐もなきぞやいそぎ
攻殺すべしとて　先一の先陣を
柳原武部右衛門　廣政二陣を酒井
右馬の尉二陣を牧野右馬の尉

遣て二万貫の寄手い永井右近
右丈　森右近太丈お物しどく
四万騎　軍勢を引　押法軍
の気拍　本多佐渡守　大久
保右衛門　安人　けるとりて
右勢　ゆ　梨

真田昌幸滝殺をいて敵城偽引変

并柳原廣政老功忠酒井
数馬堀[illegible]退討ん[illegible]
柳沢上田の城[illegible]堅固の地
して三方は大沼[illegible]
人馬共通[illegible]退手掘
のうち二[illegible]御[illegible]
松乃並木[illegible]城乃要害[illegible]

城堀矢倉等も丈夫[illegible]て
容易[illegible]べ[illegible]
[illegible]裏手に松山
有て[illegible]城より出るところ
あり又城より武[illegible]備て[illegible]
山のちかさ[illegible]
冥土の大軍[illegible]
つゝる吉田安房[illegible]謀略を極め

て敵城堀辺より引寄せ
強地にて打数をべしその工夫
して安房守はづつてさづひ
入指待是惟雑色共百人
ばかりにて打出の小松山
より幕打出して大筒強地
用意して合戦をおく〳〵建並べ
敵の近寄るを待こゝぢひ筒大鼓

の役者武者乃陣を始めて
高砂此噺子をとりそろへて
酒盛なんどをもてなしこれをふ
敵城籠り者ども陣暑るり去
べき国々打の陣を敵をあぎ
むを役立さ城堀辺を討果を
ばなりものの少くろうろるり陣ふ
柳原廉政を功の大なるべ

れこと大概推量して中々
に押付
豈出来難く推参如き志向ち
がありさまなれば彼奴るみそど
の体略うるべ変　平に向つ
く事情の働きるりいそ況
強地して打破るべーと柳原
中　御下知あり廉政々

ふ間んして元に戻る事
なれ人深き事情中へ引退
ぞる出勢の退るるとおるる
ぞ共も元に戻に百代大家と
僚う人に振舞の武士雑ぎに二百
人平ぎざる小勢そ押へん
とするに源義体略有と
思ひ百ひへと中ふんば

中納言殿いとゝ強いくり
あり出仕ひとゝきるりて出でゝ
後陣の酒井忠世が働うんと
出るゆへ柳原もとのところへ
敵地退ゆる丈ケい容易し伺ト
るゞ必ゝ敵色はあくも
退ふるゆうれといひ入れ軍ゝ
地をもつて強地と打ゝる武士い

きやゝる砂の強も仕事まゝ
羽衣をとゝふゝの時志岡が起
原板田丈左兵衛大ゝ強りて
敵をゝゝや矢ごろふ敵りは天
晴丈兎るうん手ゝ矢野
ありいゝづゝ原討死ゝるべき
るれべゝ御城中へ引帰り
ゝべーゝいゝ安房守笑ていや

きづかうのまうにて動て尺くの時方
い年未聞を知りうり歌を
不知聞るんばあるべきのうち
あるべき退くく車い容易し
迚彼元まる内手ちや鉄炮を
竹束くに中りて鉄槍も迚くうち
うの時柳原下知して一声くに向
ひて急をとうるんば志田ゲ原士お

立てりて鉄ちを合せんとまる
あり拵彼中くにうの時安房
国下知して名士おい馬くに打乗
雑人たい芝りいづして志賀よ
ゆり二十余町わうちうを退き
て逆入くんとして山の手より搦く
入る柳原ゲ軍名者るとも退蒐
んとする時廉政大ひに制し

く高くそびえたる敵を城の上迄
攻めのぼり陣を構へ置て
大沼形りと南堀の堀底如らい
美くえるゆえうく迫近させ
也此時は仗書を立て出て高間
が只今まで此陣中へ参入く
尺る手小戦一挺を元禄
より後く皆く橋石の赤房を

も過ぎ迄のごとくそて
戦を元人くは見れば一紙の札を
付たり又文字の有りたるもの
諸極大将討ぶ有いと紙ちち
うりて見附手
人れば　中納言度は仕手
まして元人雪駄の出大形なり
此書付と　上流ありて大

きそいのうちにうるはしうれが謀略
何程の事なるべきを急ぎ城攻
攻落すべし最も柳原に急て
忍を源実者をれば見方を撃るべ
二陣三陣ともそんで城攻
接けと云きりに下知ちりち
うを見ふうく酒井左衛門尉牧
野右馬丞勢陣を卿つく

高岡が名士なる代逆を撃より退
繼ぬて退手のうちにおり清ん
とするをうの色たちとりて
大沼ふてくる代見入て中く
引をり自由ふ長縄を代表
方に並木の松ありうのところ
城走りける中武者やうく
武弾三騎乗ろう切ものと

入給ふべく御
申しとゝのへ時ゝの使へ
大きゝ御きゝ三陸より出羽牧野右馬
頭より出羽を立て遣はける
御ちりの集まつづきて至りて
もく真岡さゝ諸略なれば
鉄砲もうづ振ひもせざ
きみげきると雲霞の遣ふ

ゆい高ぶ急なり後ろ手縛
りく柵門内に引入り酒井
牧野の遣来りて立ちぞくさち
れるまゝ出羽ゝ亀角城を
破ゝんとしけるうち遣まれ
門塀地ゝより赤籠一ちぐれ
きゝゝ長人笠の馬戸
地押して真岡左衛門佐幸村

繼續して鐵砲を同じ毛の幌を
巻き一廉の抱角の紋建物して
鉄砲の聲を揚させ見物武百
人手鉄砲をもりもせ武者八十騎
計り寄くせ出たり此内より父
あ房も棚の内より鉄先城
そろへく同じく同のこゑを
揚たり此中より依者つ依げ下知

より後く出せ鉄砲面霰の如
しー又大手搦手此の方の大沼
の見入の四方中に陣をれば敵
向ふの手の方角を叫ばして
鉄砲の為手味方の大きを級案
まで及びたる 池清

池清

関ヶ原軍記二篇巻之拾八

目録

一 信州上田合戦の事
并酒井左衛門討死関東勝敗軍の事
一 榊原康政 秀忠卿と誘る事
并関東勝再度上田城に取詰る事

池清

関ケ原軍記三編巻之拾八

信州上田合戦の事

并濃井左衛門尉討死関東勢

敗軍代事

四く濃井左衛門尉討死後墨ふ

編へ入飛ひ及ひこれ志面

ゞ絶き景と見くく頓りく弦地

城中おもてへ出ず
也　秀忠の柳原が陣をも
用ひ給ひて攻めたまひ攻め
給ふ辛酉戦ひあり吉田村
出張合七度迄なるせんかい
性院七人殉の働あり
せんかい　内府公より使
使者に候へ共上洛有ける

小牧より上田へ押への勢
関ヶ原の時より徳川軍勢も上田道
城遠意まして紀州をまもる
柳原廉政等人御方を吉重
手初る所なく実ケ原
の戦ひあり
上田合戦初度の戦ひ
手ぬかれなく城又大軍

をもかくあつかうこと
是編へ
秀忠公ゞ
軍役の沙汰
ありと諸人評
せしかども又子細無之
あり云當る同くあらば
大將の事いかゝへ
至近動靜
前あるの
時急近臣の評
弟い指あれ

沙汰ありこの沙汰軍者の
動無有り仍て潛出よりも
之位ひ年ばかりてい
この政るを諸ゝ宣
へり大將ゝへの行ひ怒
年生の位産物ゝ常ゝ
此諸業ゝ軍御ゝ是
皆天晴の之急命ゝ近臣

のうちに代官判をつく
役所も上様にうかん
ぜる事なるべし家中
の侍士なるひい大所の家老
松の松或をとて下より
主人を縛る夏を以の和代
なりまして写しうしに大和
代官ろうく合ざる夏

なり・年生用ゆの松の松又
申ろうへどもケ様の良を
何ぞ子細ある時い書遣り
用ひざる事なり大和の
ちゝ様を一箱と又鑿と而
指別ありあるひる高人
代家まて主人敬方
ろう人のうちひ勉

足ゆるもの家門まで必ずに
城る変命れるものん自ら
はるるへ也べ別又仕方も
るものの形り大小限べに
兜角下より上城大き加る
政り裁判仕是又い軍勢
は掘りおい人の生死有元
年るる変りむ〻し

新田左中将義貞朝臣ハ城
京の國見羽の城攻の時討死
る武人見を城る今りざん
わんるり花も義貞を見頂
る心りは軍見羽城移
を城京城おく出早く
上洛して敵山のぶり
法方は宮軍ましるる城

合せもつて於ていはるべき
お恵しどて此大なる病とも
を細細不有く所為ら
きしくと解の是非めくば
ごとく所為なる指導の生質
故大理地知りのなるべくと
殊に又地方藩庫を費
く入ざるを事として討死

しとうとしひとり元そ
義貞程の人他の君のる
ものなんや是利
尾張国る程捨おを上洛
ある時を小西の冥願なば
必定城名の国切塞ぶて
野田及の兵粮ものを立
切ん之る時い義貞京都

年永陣叶ひがたく敵軍
きるい眼あるより俄く城を
攻らるるんぞ法人の作刺
よ及ぶまま小勢をもつて
とりあしてあつまへ出らる
るい元来義貞日本よ名
を揚ん名誉なるべき州
論会の極楽寺ひと切通し

て大江田武部が討死の後へ
小勢をもとりあつめ勝利をはく
大功を立ん事ありこれ義貞が
一生涯の武勇過一ものく
手ごくそなるべきれば此軍
ごくもと敵なく野田度の
はまりのるれど討死あり
しい天命なりこれば名

將の城攻めりと雖ども
秀忠公
又
日本にて七武將の良將なり
なれども真田攻
なるべきや真田父子もこれ
又名士にもまさりて戰ひ
をなくまれば敵手に及ぶ
ざる事なりこの上田の城
地形堅固なひて實ケ原へいで
給ひ必定真田父子小屋よ
名を裏うせこのうへ依行も
上杉も頼じ合セ實来の時
前をもとうぐひそうく
ゆ目前敗りに依く一戰し
く降先地へ出のの
所忘るれ芸實ケそれ

殺しかの事の
とび軍を急ぎ
事に成ぬ
さほどの
酒井左衛門尉
異
入
も
人
味
尺
牧野
級
真
柵
鉄

地蔵てら矢ごろ三十間斗り
にてうすれ杉新ちを小橋より有り
て真田左衛門佐長旌乃無地
をうくさとりに鉄炮をうつ
この時酒井左衛門尉忠次為殿
見為今いらちしぶとをる和
ありとるのかしらを撫乃方
へ向けおとづれ家人溜く

拾待斗り我らで敷成れ
我ひ手郡乃諸畠に隠入り
申乃地乃手今敵乃
諸乃中南り敵中我らん
とするに左西くくして叫
ひ乃今いらむとうさ面手敵
の柵地柳中ゆんとうつく
をる志田安房守乃古今れ良

將ゝし能き図をめんぐゝ士卒
城下知ーて来る人も殘を寄
あまたべゝゝ窮鳥都つて猫
を咬のごとくゝ窮鳥を退て
ゝ飛ゝゝ越度をもつて
討えれと棚のうちより面々
ゝるごとく鉄炮をうつたり
よりは大筒つ佐渡まれ寄り

本陣より沼田を備てゝ鉄炮
打立る有馬井ゝ三十一人
打殺さる大筒
も鉄炮の
るより来遣さる面に前ゝり
ゝゝく惟中より態値前矢
おゝ矢ゝを討ゝ矢ゝく級
軍は暮ゝの時大ゝづれ

如ゝ時ハ主人田父子ハ国の声を
揚ゝ蒐出ん為ハ
牧野ガ兵士ハもさんぐゝ
なりて酒井ガ同勢と一ツに
如ゝ時ハ味方ハ勝ちとる
体なれば本多正信下知に従へ
く城をいりやあるべゝ
ぞつゝ門を開べしとて引
人数を門揚ゝ
柳原康政　秀忠公に従ふる変
并冥加野再度上田の城攻
法ゝ事
一
新参真田父子大ひゝ勝利
して酒井左衛門ガ前と宣後
ゝ法ゝ事左馬ノ佐幸村ハ

義雪は人まて今この首を取て
手ごろにはべるべきにあらば急ぎ
送り返さるべしいとれ侍へ
年九歳しる人なるり刈ち
同姓右京亮へ送りきり侍既に
日雪年初うびより雪手に引
とりつく年山の陣所へ
集りる　秀忠卿ち

結大将は
定りり此陣柳原武蔵守陣
ちうちあり此陣をと中上るい
安房守父子小所ありさいく
ども雪猶して年来南陣
ふ長住を敵ありつも智謀の
者まてい南陣を元来台内せる
くしてこ才いこれ大法まて

攻日以下の命を受て数日敵を攻る
ゑど浦上浜近に付る
内府公へ会釈あんせられ
ふ会のうぢをいたるうぶ申くく
不都合第一に上に不届と
申て武器共に
仰せ出
ゑども斗り
御機嫌
能くはからたぶ

お指図して通りの方法
ゑどよりくはとの程をたしして
中しる時
秀忠公大ひくいり寄合陣しり軍令
廉政
平先
秀忠公御狩中くいり
柳生宗矩
高田父子に嵐雪
平ゞ籠さをくぶく

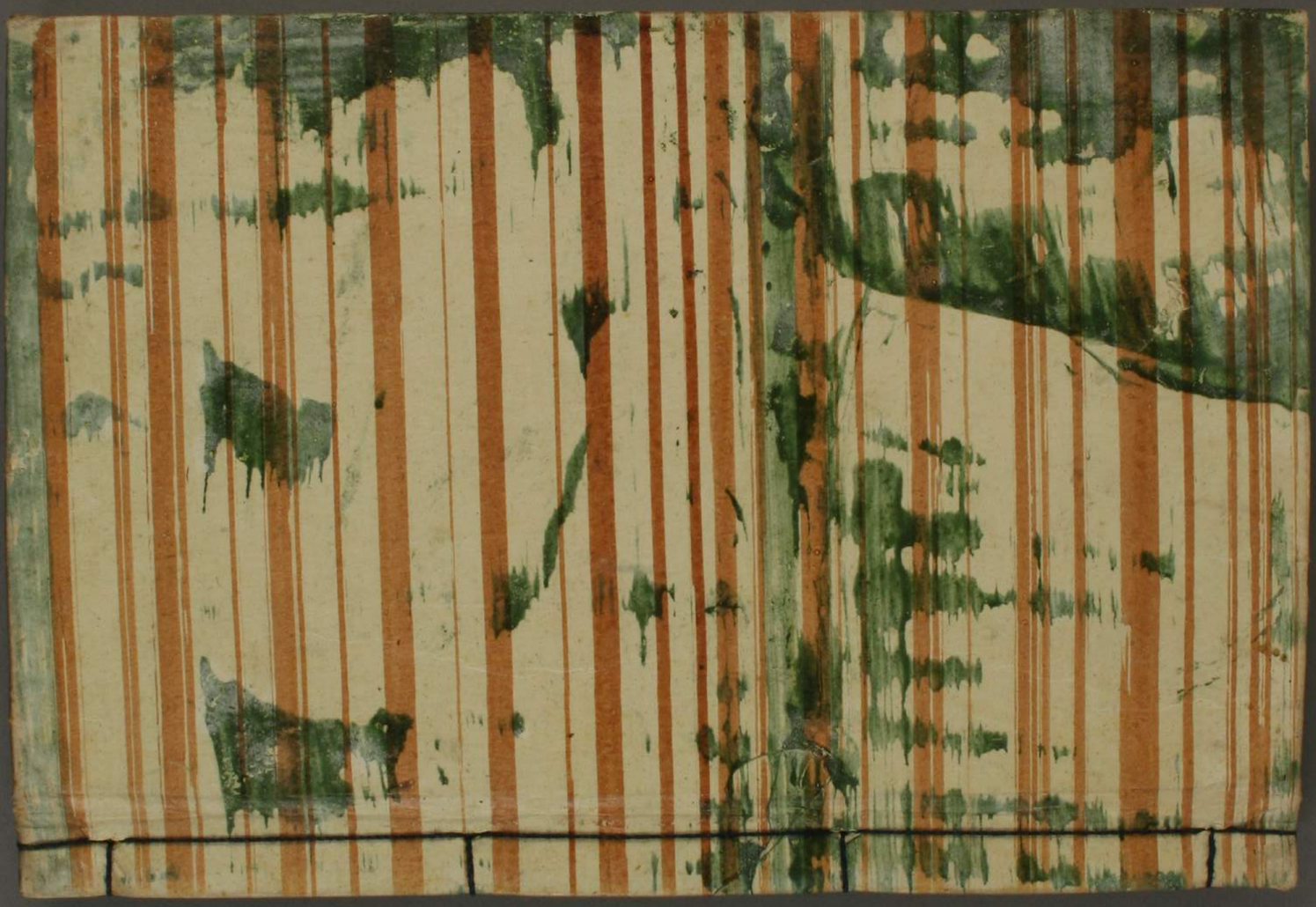
の諸畧推察するに帰しいまだ
攻ざる前なるべし是も角元今
吉岡一家と書るもく又万代
軍記是長政も此ところを立
さるべきやく又この上をこの一書
此門さんだとして上方に戦ひ
年和るるものもなべら
らばさんば明朝も手配りなり

年ふる年攻落さるべきこと
作出さるこの時如何作法まい
いつぶ此なるべりけん
上意代おりむ法のもこと
ぞんじ奉りは必定攻落さべ
きあくは条
御下知ある
べきこと思せんの
時解るべきの内は後ぞち

まぎれて攻めの手の所
堪せざる時を大きに敗走す
ゆえいく方まもなくして亡びぬ
終に　中納言殿の四下知
をもって先一の先陣を柳原兵部
右衛二陣を酒井右京亮　大久
保右馬頭を二陣を牧野右京亮
義右近を先　松平如泉守　書

平紀伊守は始めとして
ちかく近辺の在家をとり
ちかく深田に引退き明るし　四方
八面一時に攻めの
出下知あり
ぐるに錦旗の高く揚
て城の四方に鬨の声を挙り堪中
に籠る者一本も残

たゞまりうくんく言もるの
寄手い是を見てさらや真田
を蔵矢ふりそて堀の際より
押付く見るに堀際ばづか
二十間計りはれ間命ふくく
たるも獨ぶけて清兵
衛を堀端へ投へき寄手
はんく能へりくさる程

平水い兵ごくに成りて
ゆり寄手はれ者共大きく怪び
牧地が高士おも一騎よるつく
堀の中より攻ふんとし
るに鉄炮を見くも武者一騎
ぶも見へざりけり 池清

寛ケ原軍記二十編巻の十八終 池清